第11回 六条円卓会議 開催報告②

宗教教団と他領域の接点を探る

2024年3月11日に開催された第11回六条円卓会議は、「宗教教団と他領域の接点を探る」のテーマのもと、議論を行いました。前号（『宗報』2024年7月号）では、講師としてお招きした原敬子先生の発題により、宗教教団はどのような役割を持ちうるのかという課題を起点に、その具体的な取り組みとして、伝統宗教のひとつであるキリスト教（カトリック）の教会が直面している問題と、挑戦しようとしていることについてお話しいただき、その内容（前半）を報告しました。

今号では、後編として、有識者発題のうち「公共性」や「宗教の役割」にかかわる内容（後半）を報告するとともに、有識者発題を受けて全体討議にて掘りさげて議論された、いくつかのトピックを報告いたします。

◆有識者発題（後半）

五、「公共性」と「宗教性」

宗教と公共空間・公共性というものを考えた図（次頁）を紹介します。「教会」というのは、いわゆる「教えの会」でもありますが、ボーダー（境界線）の「境界」とかけた言葉としても理解できます。

境界線の上に教会を建て、その真ん中に「私」が所属している「私たち」という領域があり、そこに所属していない「彼ら」を結び付けるには、この「異人」という存在が必要です。だから「異人」というのは、いわゆる異界と現界を結び付ける存在であると考えられます。

カトリックでいうと、地方教会という

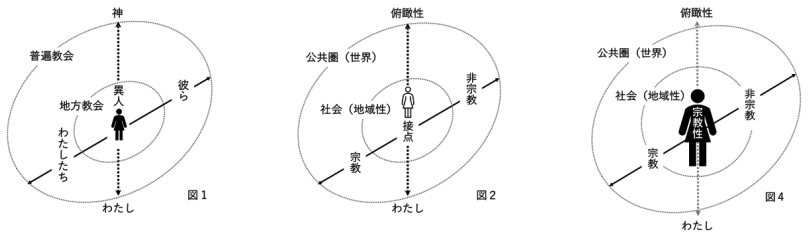
のは、まちの小さい教会です。その小さい教会の中にいる「異人」である司祭としての私は、「神」と「私自身」の間を取り持ちながら、「私たち」と言われている人と「彼ら」の間を取り持っていく使命を持っています（図1）。ただ、司祭だけがその役割を持つわけではありません。つまり信徒、檀家の方がたもそのような役割を持っているということが重要です。

教団に属する「私自身」は、「宗教」と「非宗教」の間に立っています。その「私自身」は、私を俯瞰し自分自身を眺めること（超越性・俯瞰性）を、祈りを通して行っている。そして宗教に属していながらも、非宗教との間に立っている。ですから、その接点としての「私」が「地域性」も持ちますし、そして「公共圏」の中に存在しています（図2）。こうなってくると、単に信者だけではなくて、人間の中にある宗教性、例えば「自分は宗教とは関係ない」と思っている方も、自分自身と自然や自然を超えたものとの関係性みたいなものを、俯瞰性の中で見いだすことができるのではないかと思います。そうすると、宗教と非宗教の間に、全ての人が立っていると考えることができます（図4）。

人間を語る場合は、その人間の中に宗教性というものもあります。それは冒頭に言いました「宗教教団」や「教団」とはもちろん別物でしょう。その中で公共性といったときに、「私自身」はもちろん「異人」ではあるけれども、全ての人の中に宗教性があるのであれば、この地域性・公共性というものを一緒に形づくっていくことができる。「ともに生きる場」をつくることができる、ということです。

最近ビジネス界で使われている「氷山モデル」も非常に参考になるのではないかと思っています。氷山の奥底には、外に出ている山よりも、もっと深い氷の山、海の中に沈んでいる逆の山があり、その部分を理解しようとする。もっと細かく言えば、その奥にあるのは、価値とか信念、あるいは無意識の世界ということになってくるわけで、心理学にあたります。こうした社会科学系の学問も、宗教と一緒に歩んでいくことができるので

4「ともに生きる場」をつくる→公共性



『現代宗教2024』掲載
原敬子「神学的実践と宗教リテラシーの間（はざま）を感受する試み ― 輪講「諸宗教における自然と人間」を通して」より

はないかと考えています。

最後になりますが、公共性の創造には、宗教の役割があるのではないかと思っています。ドイツの神学者であるドロテー・ゼレは、『内面への旅―宗教的経験について』で、次のように述べています。

「人間は何にあこがれているのか。それは全体であろうとする願い、切り刻まれてばらばらになっていない生への要求である。宗教的な言葉に属する『救い』という古い言葉は、まさしくこの全体であること、切り刻まれてばらばらになっていないこと、壊れていないことを表現している」。

私たち一人ひとりは、あたかもばらばらで、現代社会の中を浮遊しているように見えます。しかし、一致しようとする。自分は一人。一人だけれども、この世界の中の一部、宇宙の中の一つである。私は全体でもあるという理解ですね。ばらばらになった一片ではない。「救い」という言葉には、そういった人間の要求、願いが含まれています。

ですから、氷山が、海の底深くに隠れた氷の塊が土台となっているように、人の心の奥深くに「信」があるとするならば、その「信」を目覚めさせ、ともに一致し、生きていける公共の場を創造するのもまた、人間にかかっています。一人ひとりの人間の中にある「信」を目覚めさせて、ともに一致して生きていける公共の場を創造するところに、宗教の役割があります。

＊今回の有識者発題に関連する内容は、原敬子先生の論文「神学的実践と宗教リテラシーの間（はざま）を感受する試み―輪講「諸宗教における自然と人間」を通して―」（『現代宗教２０２４』、（公財）国際宗教研究所、２０２４年1月発行）にも詳しく論じられています。併せてご参照ください。

◆全体討議

1、共通点、相違点を探る試み

２０２１年から始められた「シノドス」の新たな方法は、識別（discernment）のために会話を重ねていくというものでした。キリスト教の中では、中世の神秘主義以来の伝統的な祈りの方法論からきており、一人の人間と、共同体としての人間が一緒になって自分たちの生き方の方向性を決定していくことが土台になっています。

こうした対話の方法について、全体討議では、「哲学対話」や「話し合い法座」などが取りあげられました。

「哲学対話」は、参加者が輪になって問いを出し合い、一緒に考えを深めていく対話です。知恵が探求され、参加者の

対話の内容が結集される形で、相互理解・共通理解が目指されていきます。この点は、「Conversation in the Spirit（霊における会話）」の第3ターンにおいて、共通点や相違点を見つけていくという部分などと、方法論が似通っているとの指摘がありました。

また浄土真宗本願寺派で長く続けられてきた「話し合い法座」は、特定のテーマに基づいて話し合いがなされ、法話などでまとめられることもあります。結論を出すことよりも、話し合いの経験によって、各自で味わいを深めていく点に特徴があるのではないかとの指摘もありました。

さらに六条円卓会議の第1回で「公共性」を取りあげたときの対話の方法は、「トロッコ問題」（倫理的な思考実験のひとつ。多数を助けるために少数を犠牲にすることが問われる）のようなモラル・ジレンマをめぐって、対話や議論をつなげていくといったものでした。その点、ラウンドを回しながら共通の話題を見つけていくという「シノドス」の方法は、お互いが共有することのできる物語（公共的なボディ）を作っているという感覚となり、共通理解へと結びつきやすいのではないかと指摘されました。

それぞれ、始まったきっかけも方法論も異なりますが、「シノドス」で試みられているような、参加者がそれぞれ平等な発言の機会を持ち、自分の心に響いたところを述べ、共通点や相違点を探っていくという方法は、他者理解が深まり、新たな気づきを生みだす点で大切であることを共有しました。

そうした話し合い（対話）における参加者のスキルはどう醸成されるのかといった疑問も出されました。修道会にお

原　敬子（はら　けいこ）

上智大学神学部教授。１９６５年生まれ。広島大学大学院修了（教育学）、Institut Catholique de Paris（パリ・カトリック大学）において神学修士号（ＳＴＬ）取得、上智大学大学院博士後期課程において実践基礎神学を研究し博士（神学）取得。現在、上智大学神学部神学科において実践基礎神学、宣教学、カテキズム、さらに、公共圏におけるキリスト教の意義、シノドスについての研究を継続している。著書に『キリスト者の証言：人の語りと啓示に関する実践基礎神学的考察』（教文館、２０１７年）、共編著に『宗教信仰復興と現代社会』（島薗進編、「《時のしるし》を読む信仰の感覚―《日本の教会》の信仰復興」、国書刊行会、２０２２年）、編著に『「若者」と歩む教会の希望』（日本基督教団出版局、２０１９年）、『正義と平和の口づけ：日本カトリック神学の過去・現在・未来』（日本基督教団出版局、２０２０年）ほか多数。

いては、自分だけの世界に入って、他者が何を言おうと関係ないという雰囲気が昔はあったそうです。しかし、1960年代以降、司祭が観衆の方を向いて対面となってミサを行うようになり、1970年代頃には、信徒同士が顔をつきあわせて話をするようになりました。当初は、自分の話をすることに「慣れていない」「うまく話ができない」「何を話したら良いのかわからない」というところで気を揉まれ、「いい話をしなければ」と緊張し話ができないといったことが続いたものの、時間の積み重ねの中で、上手く回るようになっていったそうです。話し合いの試みを一過性にせず、試行錯誤し続けることが重要であるということです。

2、テーマ設定のための「準備」

話し合いのテーマをいかに準備するかについても質問がありました。「シノドス」では、教会から離れた人にどうアプローチするのか、どのようにボトムアップ形式で信徒を巻き込みながら進めていくのかなどに苦心されています。そこで大事なのが、信徒の「声」を集める「準備」です。

神学の流れを踏まえれば、1980年代以降、哲学の領域の中の解釈学が神学の中に取り入れられ、人びとの話を聞くこと、これが原資料であるという理解がでてきます。そして現在進行中の「シノドス」では、プロセスの第1期に、全世界からバチカンにテキスト（信徒の「声」）が集められました。世界各地に住んでいる信徒がどんなふうに生きているのかという声（証言）がまとめられた膨大な資料を、神学者が徹底的に読み込んで、新たに必要なテーマが構築されていったそうです。

これは、「一人ひとりの中に宗教性がある」「人びとのなかに生き生きとした信仰や問いがある」という理解に依拠しており、そこから浮上させていく形で準備されていきました。これをもとに、地方教会では「10個の探求すべき問い」について、それぞれのやり方で話し合われ、それが国、大陸、世界と、段階を増える毎に問いが深化し、それまで問われなかった問いが浮上し、さらに深まっていくというシステムとなってきています。

このシステムを浄土真宗の寺院に置き換えたとき、僧侶だけで「テーマ設定」を行えば、当然、僧侶が言いたいこと、やりたいこと、導きたい方向性が設定されることになってしまいかねません。人びとがもつ宗教性や、生きた信仰、生きた問いを基礎とすることで、立場を超えて話し合うことが可能となってきます。

3、氷山モデルで考える「公共圏」

話し合いの場に人が集まれば、共通理解が必要となってきます。これを原先生は「信」や「了解」という言葉で説明されました。「今日は晴れている」「この電車は次の駅で止まる」といった天気予報

や社会的な約束事などに関しては、「お互い信じている」「みんなで共有している」といった状態ですが、共通の理解があれば、教団あるいは話し合いの場において、普段の常識や理解とは違う話が出てきたとしても、議論を展開していくことができます。キリスト教、イスラム教、仏教などの諸宗教に「信」の目的語がそれぞれあると仮定したとき、それがばらばらであったとしても、その奥にある普遍的なところで共通することができれば、同じ土台で話し合うことができます。そうしないと、「私は宗教とは関わりあいません」という人に対することができないと原先生は指摘されました。

そのとき、講義のはじめに述べられたように、「宗教」「宗教教団」「教団」という3つの言葉を分けて考えなければならないことに注意が必要であり、この使い分けを「宗教とは関係がない」と言っている方とどう共有するのかが、公共性を考える上で今後のテーマになると、原先生は指摘されました。「教団」に属していないからといって、「宗教性」がないわけではありません。教団の本質的な価値が、突きつめれば公共圏の維持に齟齬をきたさない形で前提となることで、普遍性が維持されていきます。そこで重要なのが、表層に現れた部分の奥底にある価値をみんなで話し合って探っていく「Conversations in the Spirit」のアプローチです。

当初は男性ばかりであった「シノドス」も、現在では女性が多く入り、バチカンの司教省のトップもシスター、シノドス委員会のセクレタリー（次官補）のひとりも女性が務めているそうです。このように、教会の改革として、男性のみが意思決定するという形が変化してきており、これもシノドスの成果の一つと考えられます。これをどう信徒が理解し、どう調和して生きていくのか。自分たちの信仰をもちながら、いかに公共性の中に出て行くことができるのか。これらが今後の課題となると強調されました。

4、他領域と接するときのことば

宗教教団の中で涵養された人が、社会や他分野と接するとき、宗教のことばを安易に用いることは非常に危険であり、衝突が生じてしまうのではないか、との疑問があがりました。例えば「〇〇経にはこう書いてある」ということを言い出すと、本来の意味も変わってくるし、都合の良い使われ方になりはしないかということです。宗教者である自分自身が感じている見方で社会問題に問いかけ、語り合っていくことが重要で、自分の属する共同体において、その宗教において育てられた一人の人間として社会に対して何ができるのかを考えていくことが大事ではないかとの指摘です。

これに対し、原先生は、これまでのキリスト教のあり方についてお話しされました。日曜日には教会に行くことが習慣になっており、月曜日から土曜日は「社会に行く」「社会に紛れた人間」といっ

た信仰理解のもと、教会がリーダーシップをとってきた面があるそうです。しかし、月曜日から土曜日までも、信仰者であることに変わりはなく、その中でいかに生きていくのかが重要であると言われました。

自分の属する教団は共同体のひとつであり、その泉から涵養されて、社会の中で人間として、社会の言葉で、社会をよりよくするためにどうしたら良いのかが問われてくるということです。

◆まとめにかえて

全体討議では、教団内における「話し合い」のテーマ設定や話し合いの方法、「公共圏」における宗教の役割、そして他領域と接するときの「ことば」の問題などについて議論されました。伝統宗教において共通する課題や、今回議論された話し合いの方法やテーマ設定などに関しては、各寺院においても有用な内容が含まれているかと思います。そして、話し合うテーマ自体が、教団内に限らず地域や会社などさまざまな場面で活用できれば、そうした経験を積んだ人が社会でいかに生きていくのかにつながることを学びました。

また、原先生の講義の中で、日本のキリスト教徒はわずか1％しかおらず、教会を維持していくことの難しさもお話しいただきました。本願寺派においても、海外開教区・開教地も含む国内外に多くの寺院があり、念仏者がいます。地域から世界を、そして世界から地域をみる大きな視野を持ち、違いを感じ合い、話し合いを積み重ねていかなければ、「私たち」の範囲はいつでも限定的なものとなってしまうことには、注意したいと思います。

さらに、浄土真宗において、法義を語る場、聴聞の場が大切にされてきた伝統をいかに維持・継続し、世の中の動きの中でいかに対応していくのか、そしていかに未来世代につないでいくのかが問われていることを、改めて認識する機会にもなりました。そのために、今話し合うべきテーマを掘り起こし、一方で、社会に生きている信仰者、そして一人の人間として地域性・公共性の中でいかに振る舞っていくべきなのかを問い続けなければなりません。宗門内外のさまざまな立場の方や若い方々の意見・感性を取り込みつつ、教団は社会にとってどのような存在でどのような役割を持ちうるのかを引き続き考えていきたいと思います。

総合研究所　現代教学・課題研究室